

愛 媛 県

(愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課 小川遼)

1. 新病害虫の発生

(1) トマトキバガ(令和4年5月20日特殊報)

中予地域のトマト施設周辺に設置したトマトキバガの侵入警戒トラップにおいて、1地点でトマトキバガ疑似成虫が誘殺された。捕獲された成虫を神戸植物防疫所に同定依頼した結果、本県では未発生のトマトキバガであると同定された。

2. 水稻

(1) 葉いもち

早期栽培では、常発地で6月上旬に初発を確認した。初発後の増加は緩慢であったが、6月中下旬から罹病性品種を中心に発生が増加した。普通期栽培では、7月上旬の罹病性品種で発生を確認し、7月中下旬にかけ増加傾向となり、8月以降は、罹病性品種で発生が増加した。発生量は平年並であった。

(2) 穂いもち

早期栽培では、常発地において7月中旬以降に葉いもちの発生がやや多い地域で穂いもちの発生がみられたが、多発圃場は少なかった。普通期栽培では、8月上旬出穂の短期栽培(品種:あきたこまち)でやや多発傾向となった。また、8月下旬出穂の中生品種では発生はやや少なかった。発生量は早期栽培で並、普通期栽培でやや少であった。

(3) 紋枯病

早期栽培で6月下旬、普通期栽培で7月中旬に初発を確認した。早期栽培では7月以降も徐々に発病増加はみられ、8月に入ると上位進展している圃場が多くなった。普通期栽培では、7月の発生は平年並であったが、8月以降の高温により急激に上位進展する圃場が多くなり、9月以降も上位進展は続き、やや多の発生となった。発生量は早期でやや多、普通期栽培で並であった。

(4) 稲こうじ病

早期栽培(7月上旬出穂)では、一部圃場で発生が認められ、やや多の発生であった。普通期栽培では、短期栽培のあきたこまち(8月上旬出穂)で発生を確認した。中生品種の発生は、前年ほどの多発生でなかったが、発生は広範囲で確認され、多圃場も認められた。発生量は早期でやや多、普通期栽培で並であった。

(5) セジロウンカ

予察灯での誘殺は6~7月にかけて平年並であった。本田での発生は、早期栽培、普通期栽培ともに少ない傾向が続き、発生量は早期栽培、普通期栽培ともに少であったが、飼料米で穂が褐変する多発事例が認められた。

(6) トビイロウンカ

予察灯での誘殺は7月中旬に、7月下旬に本田で初発を確認した。圃場での発生密度は低く、広域調査での発生圃場率は、7月下旬~8月中旬でやや多であったが、8月下旬~9月上旬では、平年並となった。坪枯被害は普通期栽培で一部認められた。発生量は早期栽培、普通期栽培ともに並であった。

(7) コブノメイガ

早期栽培及び普通期栽培ともに、7月中旬頃から第一世代幼虫による被害が確認されたが発生程度は低かった。普通期栽培での第二世代幼虫による被害はやや増加し平年並となった。発生量は早期栽培、普通期栽培ともに並であった。

(8) 斑点米カメムシ類

6月の畦畔雑草での発生密度は少なかったが、早期栽培圃場での発生密度は並~やや多であった。7~8月にかけて、畦畔雑草の発生密度は平年並であったが、早期栽培圃場および普通期栽培圃場での発生は、掬取り虫数および発生地点率ともに並~やや少であった。9月以降も畦畔雑草、本田ともに発生虫数や発生地点率ともに並~やや少であり、密度の増加は認められなかった。発生量は早期栽培、普通期栽培とも並であった。なお、近年イネカメムシの確認事例が増加している。

2. 麦

(1) 赤かび病

裸麦では5月上旬頃から発生が散見され、5月上旬の主要産地の広域調査では並の発生であった。また、小麦でも5月上旬までは発生は見られなかったが、収穫前(5月中下旬以降)に一部でやや増加した。発生量は平年並であった。

3. 大豆

(1) ハスモンヨトウ

7月下旬頃から食害葉が散見されたが、被害葉の増加はなかった。9月中旬以降に一部の圃場で被害葉が増加した。発生量はやや少であった。

4. 果樹

(1) カンキツ・黒点病

6月から発病が認められたものの、発病程度は低く推移した。また、8月下旬の降雨以降、後期の発病は増加し、一部で発生が多い園地が見られたが、発生程度は低かった。発生量は少であった。

(2) カンキツ・かいよう病

2月に行った越冬病斑調査では、発病度及び発生圃場率ともに多であり、5月の新梢における発病度、発病葉率ともに多であった。6～7月はやや少なく推移したが、8月以降は一部で多発生の園地がみられた。発生量はやや多であった。(令和4年5月31日：注意報)

(3) カンキツ・ミカンハダニ

越冬虫数は平年並、4月の発生量は平年並に推移した。5月において寄生葉率はやや多となったが、6月以降の発生量は平年並～やや少となった。7月に発生ピークとなり、一部で多発圃場もみられた。発生量はやや少であった。

(4) カンキツ・ゴマダラカミキリ

6月には県内各地で成虫を確認した。一部で発生が多い園地がみられたが、発生量は平年並であった。

(5) かき・炭疽病

結果母枝の越冬病斑発生園地率は平年並であった。7月に果実での発病度はやや多となったが、8月以降は平年並に推移した。発生量は並であった。

(6) かき・角斑落葉病

7月以降の降雨により発病が助長され、発生量は平年よりやや多であった。

(7) キウイフルーツ・かいよう病

4月から一部の園で樹液の漏出が認められた。定点調査では漏出個所数は昨年より多くなった。葉の発生は昨年より少なかったが、新梢での枯死被害がみられた。前年よりも発生はやや少なかった。

(8) 果樹共通・果樹カメムシ類

越冬密度及び越冬成虫確認地点率は平年並であったが、フェロモントラップでの誘殺数が急増し、

その後、8月中旬まで予察灯・フェロモントラップでの誘殺数が非常に高く推移した。ナシやキウイフルーツ、カキなどで被害が発生したが、8月中旬以降、発生量は減少し、9月はやや少～少発生であった。発生量は多であった。(令和4年5月31日：注意報)

5. 野菜

(1) 冬春トマト・タバココナジラミ

10～1月、4月に発生が認められ、寄生株率は、10月は平年並であったが、11月には増加し、12月以降は、やや少～並で推移した。発生量はやや少であった。

(2) 夏秋トマト・灰色かび病

6月から茎葉での発生が認められ、期間を通して発生した。葉での発病株率は6～7月は概ねやや多く推移していたが、8月以降に増加し、9月に多となった。雨よけハウス内の菌密度の高まりによりゴーストスポットの発生も多く見られた。発生量は多であった。

(3) 夏秋トマト・タバココナジラミ

調査の中では栽培期間を通して発生は認められず、発生量は少であった。

(4) 冬春ナス・アザミウマ類

ミナミキイロアザミウマは2月から発生が認められ、気温が高く推移したため、4月にかけて発生量が増加したものの、5月には並の発生量となった。発生量はやや多であった。

(5) 夏秋ナス・ハダニ類

期間を通して発生が認められた。寄生葉率は、6月～7月は平年並であったがその後に増加し、8月はやや多、9月は多となった。発生量はやや多であった。

(6) 冬春きゅうり・べと病

抑制栽培では、10月から発生が認められ、12月に増加し、やや多の発生となった。促成栽培では、12月から発生が認められ、その後の発病葉率は平年より高く推移した。半促成栽培では、4月から発生が認められ、発病葉率はやや多の発生であったが、5月は平年並となった。発生量はやや多であった。

(7) 冬春きゅうり・褐斑病

抑制栽培では、10月から発生が認められ、発病葉率は平年並であった。半促成栽培では、4月から

発生が認められ、平年並であった。促成栽培では、発生は認められなかった。発生量はやや少であった。

(8)夏秋きゅうり・べと病

6月から発生が認められ、発病葉率は7月にピークとなり、9月は平年並となった。発生量はやや少であった。

(9)夏秋きゅうり・褐斑病

7月から発生が認められ、発病葉率は8月～9月に平年並となった。発生量は平年並であった。

(10)夏秋きゅうり・アブラムシ類

6月から発生が認められ、7月に減少傾向で推移し、8月は圃場により差があるが、1葉当りの寄生虫数が最も多くなった。期間全体での発生量は多であった。

(11)夏秋きゅうり・アザミウマ類

ミナミキイロアザミウマは、6月から発生が認められた。1葉当たり寄生虫数は当初から高く推移したが、7月は減少傾向で推移し、8月に増加した。発生量は多であった。

(12)春キャベツ・菌核病

1月から3月まで発生が認められた。1月は発生程度「中」の圃場が認められたが、4月以降の発生は認められなかった。発生量はやや少であった。

(13)春キャベツ・アブラムシ類

2月から発生が認められ、平年の8倍となったが、4月に寄生株率は平年並となった。実害を生じるほどの発生はなかった。発生量はやや多であった。

(14)タマネギ・白色疫病

1月に発生が認められたが、それ以外での発生は認められなかった。発生量は平年並であった。

(15)タマネギ・べと病

暖冬により一次感染が助長され、2月から発生が認められた。3月上中旬の普通期栽培での発生圃場率は平年より多く推移した。発生量はやや多であった。

(16)サトイモ・ハスモンヨトウ

6月から発生が認められた。食害面積率は8月に増加したが、9月には減少した。期間全体での発生量はやや少であった。

(17)冬春イチゴ・アザミウマ類

期間通して発生が認められ、寄生花率は、概ね平年並で経過したが、2月と5月にやや多となった。発生量はやや多であった。

(18)冬春イチゴ・ハダニ類

期間を通して発生が認められ、寄生株率定植直後の10月に最も高くなった。他の月はやや多～多で推移した。発生量はやや多であった。

令和4年度 主要病害虫発生状況(愛媛県)

単位：ha

作物名（作付面積） 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名（作付面積） 病害虫名	発生面積	摘 要
早期水稲（2,904）			カキ（567）		
いもち病（葉いもち）	600	並	炭疽病	360	並
いもち病（穂いもち）	500	並	うどんこ病	475	並
紋枯病	2,600	やや多	カキノヘタムシガ	90	やや少
ごま葉枯病	330	やや多	果樹共通（－）		
イネミズゾウムシ	1,800	やや少	果樹カメムシ類	－	多
コブノメイガ	850	並	冬春トマト（34）		
セジロウンカ	1,200	少	灰色かび病	10	並
ツマグロヨコバイ	350	少	葉かび病	7	少
ニカメイガ	35	やや少	タバココナジラミ（全タイプ）	14	やや少
斑点米カメムシ類	2,200	並	夏秋トマト（112）		
ヒメトビウンカ	1,850	並	灰色かび病	70	多
イチモンジセセリ	200	並	葉かび病	1	並
普通期水稲（10,498）			かいよう病	2	やや少
いもち病（葉いもち）	7,500	並	タバココナジラミ（全タイプ）	－	少
いもち病（穂いもち）	4,400	やや少	オンシツコナジラミ	40	多
紋枯病	9,500	やや多	冬春ナス（10）		
稲こうじ病	1,520	並	うどんこ病	6	やや多
ごま葉枯病	2,620	並	アザミウマ類	6	やや多
イネミズゾウムシ	1,300	並	夏秋ナス（137）		
コブノメイガ	3,500	並	うどんこ病	70	やや多
セジロウンカ	3,400	少	アブラムシ類	39	やや少
ツマグロヨコバイ	2,250	やや少	アザミウマ類	80	やや少
トビイロウンカ	1,210	並	冬春キュウリ（34）		
斑点米カメムシ類	6,200	並	べと病	34	やや多
ヒメトビウンカ	4,900	並	うどんこ病	18	やや少
ニカメイガ	250	やや少	ミナミキイロアザミウマ	34	並
イチモンジセセリ	500	やや少	夏秋キュウリ（194）		
麦（2,070）			べと病	116	やや少
赤かび病	190	並	うどんこ病	20	少
うどんこ病	165	並	アブラムシ類	97	多
裸黒穂病（黒穂病類）	740	やや多	ミナミキイロアザミウマ	116	多
大豆（338）			春キャベツ（129）		
ハスモンヨトウ	210	やや少	菌核病	32	やや少
吸実性カメムシ類	115	多	アブラムシ類	65	やや多
カンキツ（11,250）			タマネギ（322）		
そうか病	523	並	白色疫病	12	並
黒点病	10,050	少	べと病	41	やや多
かいよう病	2,253	やや多	冬春イチゴ（76）		
ヤノネカイガラムシ	766	並	うどんこ病	25	やや多
ミカンハダニ	9,740	やや少	炭疽病	7	並
アブラムシ類	6,840	やや多	灰色かび病	22	やや少
ゴマダラカミキリ	1,365	並	ハダニ類	49	やや多